

琉球大学における大学と附属小中学校との共同研究

辻 雄二・萩野 敦子・山口 剛史

1. はじめに

琉球大学は、沖縄県がまだ米国統治下にあった1950年、戦争の爪痕が残る首里城の跡地に創設された。戦後復興と教育再興という住民の強い要望が米国軍政府を動かして成立した琉球列島初の大学である。1966年からの琉球政府立時代を経て1972年の日本復帰と同時に国立大学となり、1977年には西原町・宜野湾市・中城村の3市町村の接点地域にある広大な新キャンパス(西原キャンパス)へ移転した。創設以来一貫して地域の人材養成と知の創造に貢献してきた本学において、1981年に小学校が、1984年に中学校が、それぞれ教育学部附属学校として設置された。西原キャンパス内に校舎がある両校は、教育学部から徒歩で数分の距離にあるという、他の国立大学附属学校にはない立地となっている。その好条件を活かしつつ、また近年は子どもをめぐるさまざまな現代的な教育課題に対峙するために、教育学部はもちろん学内諸部局等と連携しながら、多様な「共同」の研究や取組が行われている。本稿では、限られた紙幅ではあるが、それらを紹介していきたい。

2. 教育学部共同研究推進委員会の取組

本学部の共同研究推進委員会は地域連携部会と附属学校部会の二部会から成るが、ここでは本稿の趣旨に沿い、後者に絞って述べる。附属学校部会には、多くの学部・研究科および教職センター教員が参画し、附属小学校・附属中学校ともに教科をベースに小中学校の教員と大学教員が共同研究をすすめている。

附属中学校においては、中学校教科部にそれぞれ教科教育もしくは教科専門の大学教員が共同研究者として、日常的な授業づくりも含め日常的な研究活動をすすめている。研究推進のサポートとして、研究推進部と共同する大学教員を総論担当として位置付け、研究推進部をサポートする体制をつくり、全体的な研究推進を共にすすめているのが特徴である。

附属小学校では、中学校と同様に教科ベースに共同研究者を学部の教員から選び授業づくりをすすめている。本年度より、中学校と同様に研究推進部との協働をすすめるべく研究推進WGを立ち上げ、研究推進部会に参加し、校内研修のすすめ方、総論に関する方向性などについて協議をすすめ、校内研修に提案するというサイクルをつくりだしてきた。そのため、校内研修にも必要に応じて大学教員も参加し、その議論に関与するようにすることで、学校全体の研究活動を学部教員にも伝えられるようにし、組織的な共同研究になるよう改善を図ってきた。

今後は、小中それぞれの公開研究会が終了し、研究のまとめ、次年度計画づくりに向け、附属学校の研究がより深化するよう学部教員がサポートしていくこととなる。これまで、この部分に対する協働が弱かった。そのため、総論担当、研究推進WGを中心に協働をすすめていく予定である。

3. 教育実習以外の教員養成における協働

教育学部附属学校として両校は、教育学部(2017年度の改組により生涯教育課程を廃止し学校教育

教員養成課程に一本化した)に在籍する全学生を教育実習生として受け入れている。また、本学が2016年に設置した教育学研究科高度教職実践専攻(教職大学院)においても、1年次前学期の必修科目「課題発見実習Ⅰ」の受け入れ先となっている。

これらは「実習校」たることを重要な役割の一つとする附属学校においてはデフォルトであるが、それ以外に下記の教育学部授業科目において学部と附属学校が連携することで、より充実した教員養成に資している。同時に、言うまでもなくそれぞれの取組は、いわゆる「教員の働き方改革」に資するとともに、児童生徒の学びと育ちを大学と附属学校が一体的に支えるものとなっている。

【附属小教育ボランティア】主として附属小学校教育実習に登録している教育学部3年次の学生が、附属小学校の学年行事や諸活動において教職員の指導補助を行うことを通して、子ども理解と学習活動に対する経験と知見を深める。単年度につき4～6組が開講され、クラスAは5年生の離島での海洋体験宿泊学習等、クラスBは4年生の自然環境の中で集団宿泊学習や登山活動等、クラスCは3年生の災害発生を想定した段ボールを使った避難所づくりや避難所体験活動等、クラスDは1・2年生の年間を通して学年行事や遠足等に、それぞれ参加する。クラスDについては、年度によりさらに複数のクラスが開講されることがある。

【教育実践ボランティアⅡ】主として附属中学校教育実習に登録している教育学部3年次の学生が、附属中学校で放課後に学校に残って宿題や課題、自ら補習をしたい内容等について学習する生徒たちを、サポートする。通年開講とし、学校側が日程を決め、学生たちは概ね週1回1時間程度の学習支援を行う。生徒たちが取り組む課題は必ずしも学生自身の担当教科とは限らないが、保護者や教職員には言えない生徒の本音を引き出しながら、親身になって活動している様子がうかがえる。

【教職インターンシップ】県内外の中学校または高等学校の教員候補者選考試験に合格し、卒業後4月からは正規教員として学校現場に出る教育学部4年次および教職大学院(学卒)2年次の学生・院生が、1月から2月にかけて5日間、教職員と同じ日程で、授業内外の全ての教育活動を体験する。インターンシップ前後には、沖縄県が定める公立学校教員等育成指標の「採用ステージ(1年次)」版をアレンジした自己評価票を用いて自身の教員としての資質・能力を確認する。過去には、実習生に附属中学校教員が信頼を寄せて、生徒同士の喧嘩のトラブルがあった後に両生徒の指導を委ねたこともあり、学校側の協力と理解により、貴重な現場体験の機会となっている。

4. 法務研究科との協働～スクールロイヤーの取組～

2020年度より、教育学部長より本学法科大学院の教員2名と弁護士1名にスクールロイヤーの業務を委嘱し、附属小中学校における学校事故や生徒指導、保護者対応等についての指導・助言を行うサポート体制を整えた。具体的には、附属小中学校の児童・生徒支援委員会にスクールロイヤーが参加し、様々な問題の解決に継続的に取り組むことで、教職員は問題の解決に向けての手順を整理し対応することができ、本務を円滑に進められるようになった。

また、附属中学校では2021年度に、生徒会を中心となって「校則改正プロジェクト」を立ち上げ、各学級の生活委員の生徒が集まり、校則についての話し合い活動を行った。その指導・助言、そしてリーガルチェックをスクールロイヤーが担ったことで、生徒のリーガルマインドの育成に大きく寄与する等、教育面においても効果的な協働が進められている。

そして、これらの協働の成果を踏まえ、法科大学院では、教職大学院と連携してスクールロイヤーの養成もスタートさせ、2021年度より「子どもの教育と法」を授業科目として開講し、今後は法科大学院の大

学院生が附属学校を訪問して臨床的な実習を行う「スクールロイヤークリニック」も計画されており、今後更なる活動成果を挙げることが期待されている。

5. 農学部との協働～食育の取組～

附属学校の栄養教諭を中心とした食育の取り組みは、農学部亜熱帯生物資源科学科健康栄養科学コースの栄養教諭教育実習と連携し、年間にわたる「食に関する指導計画」を策定し、学校給食が安心・安全であることに留まらず、児童・生徒の健やかな成長を考え、多様な学びを繋ぐ役割を果たしている。一例としては、10月に設定される読書旬間に合わせて「給食室コラボメニュー」を開発し、附属小学校においては絵本に出てくるメニューが提供される等々、身体にも心にも届く「美味しく楽しい食育」の実践が多様に展開されている。

また、1、2年生の生活科と3、4年生の社会科においては、農学部亜熱帯フィールド科学教育研究センター教職員の出前授業と実地指導の協力を得て、「わたしたちの野さいばたけ」や「地域の農作物〈島にんじん〉を栽培しよう」「米づくり活動」等の体験型学習に取り組んでいる。それぞれ収穫された米や野菜は栄養教諭によって「特別給食」として提供され、子どもたちの食育の取り組みを教科横断的な学びとなっている。

なお、附属学校の学校給食をめぐるのは、未来を担う子ども達が健やかに育つために、安全で安心して食べることができる栄養管理及び衛生管理の行き届いた学校給食の提供するために、2020年10月12日に新給食棟が完成し、食育を結節点とする多様な学びの創出を支えている。

6. おわりに

琉球大学では、第4期中期目標・中期計画期間(2022～2027年度)の開始にあたり今年度、公表した「国立大学法人琉球大学 第4期中期目標・中期計画」(21計画)を包括しつつ、2030年を見据えた「中期将来ビジョン」に基づいてそれを具体的に進展させる70の「ビジョン計画」を明らかにした。附属学校の課題と目標は「中期計画」には掲げられなかったが、「ビジョン計画」18に、「本学が掲げるダイバーシティ推進宣言に基づき、教育学部をはじめ学内諸部局(法務研究科のスクールロイヤークリニック等)との共同研究を推進し、児童生徒の学び最適化プログラムを構築し、その成果を公立学校や諸教育機関と連携して還元することで、附属学校の機能強化に取り組む。」として記載された。本稿で述べてきたさまざまな教育活動・研究活動を持続させ、さらに新たなアイデアを盛り込みながら、「令和の日本型学校教育」が掲げる「全ての子供たちの可能性を引き出す」児童・生徒支援と、そのスキルをもつ学校教員の養成に取り組んでいきたい。

辻 雄二(琉球大学附属学校統轄)・萩野 敦子(琉球大学教育学部長)・山口 剛史(同教育学部副学部長)

※本稿の執筆分担は以下のとおり。1節—萩野、2節—山口、3節—萩野および辻、4節—辻、5節—辻、6節—萩野。